

日本における〈蓬莱山〉の受容について

松下裕美

一 仙郷としての蓬莱山

人々は、古い時代から、彼らにとって未知の世界であった高い山、海の彼方、海の底、地平線の向こう、地の底などに、自分たちの世界とは全く違う別の世界を空想してきた。古代中国で生まれた〈蓬莱山〉思想もその一つである。

四世紀から五世紀ごろ、大陸から日本へ渡来人たちがやってきた。そして彼らの文化・思想は、新しい刺激として、日本に広まっていった。その中の一つに神仙思想があったと考えられる。こうして日本にも神仙郷という新しい異郷観が取り入れられていった。〈蓬莱山〉は、その中でも最も古代日本の人々に親しまれた仙山だった。

〈蓬莱山〉思想の始まりは古く、中国における神話伝説の源泉とされる『山海経』に既に登場している。^(注)『史記』『列子』には次のように記されている。

……人をして海に入り、蓬萊・方丈・瀛洲を求めしむ。此の三神山は、其の伝に、渤海の中に在り、人を去ること遠からず、且に至らんとすれば則ち船、風に引かれて去るを患ふ。蓋し嘗て至れる者有り。諸々の仙人及び不死の薬皆焉に在り。其の物禽獸尽く白くして、黄金・銀をもて宮闕と為す。未だ至らずして之を望めば雲の如く、到るに及びて、三神山反つて水下に居り、之に臨めば風輒ち引き去る。終に能く至るもの莫しと云ふ。世主、焉に甘心せざるもの莫し。

〔「史記」封禪書〕第六

渤海の東、幾億万里なるを知らず、大壑有り。……其の中に五山有り。一に曰く、岱輿^{たいよ}。二に曰く、員喬^{いんきやう}。三に曰く、方壺。四に曰く、瀛洲。五に曰く、蓬萊。……其の上の台観は皆金玉、其の上の禽獸は皆純縞^{じゅんこう}。珠玕^{しゅかん}の樹皆叢生し、華実皆滋味有り、之を食へば、皆

老いず死なず。居る所の人は、皆仙聖の種にして、一日一夕、飛んで相往来する者、数ふ可からず。而るに五山の根は、連著する所無く、常に潮波に随つて、上下し往還して、暫くも峙どまるを得ず。

〔列子〕「湯問 第五 第一章」

「渤海」という具体的な地名。そして、「到るに及びて、三神山反つて水下に居り」、「常に潮波に随つて、上下し往還して、暫くも峙どまるを得ず」という表現。これらをおわせて考えると、この仙郷のイメージの元となったのは、蜃気楼だったのでろう。

水平線上に時々現れ、ゆらゆらと揺れる幻の地。見えているのに、そこには近づぐことさえできない。蜃気楼が光の屈折によるものだとして、現代の私たちにとってもそれはとても幻想的なものを感じる。古代中国の人々は、このような不思議な現象を目の前にして、そこは空を飛ぶ仙人たちだけが往来できる世界だと考えて空想を広げていったのだらう。目に見えているからこそ、人々はこの仙郷を手に入れたかと思つた。不死の薬や果実、真っ白な動物たち、金銀宝石でできた宮殿などがそこにあると信じていた。秦の始皇帝も、不死の薬を求めて徐福に三神山を探させたという。しかし、どうやっても触れることはでき

ない。これにより、ますます人々はそこに憧れを持つことになったのだらう。

渡来人たちによって日本に伝えられたらうこの〈蓬莱山〉という仙郷は、平安時代に入ると、古代日本人にも深く浸透していった。漢詩文に多く引用されたことは言うまでもなく、『竹取物語』『宇津保物語』『源氏物語』などの作り物語の中にも登場した。さらにこの時代には、「蓬莱」と呼ばれる祝いの飾り物まで作られるほど、それは一般的なものになっていた。

〈蓬莱山〉はこのように広く人々に受け入れられていった。不老長生の理想郷という点には誰もが憧れるだろうし、何よりも、海に囲まれた日本に住む人々にとつて、海の遙か彼方にあるという点が受け入れられやすかつたのだらう。さらに、日本にもイメージの近い異郷観が存在していたことが〈蓬莱山〉浸透の理由として挙げられる。それが、古くから日本の人々が持っていた異郷観〈常世国〉である。

二 蓬莱山と常世国

1 常世国

日本における〈蓬莱山〉の受容について、〈常世国〉と呼ばれる異郷をはずすことはできない。数多く残されている浦島説話のうち、その初見である『日本書紀』雄略二十

二年の記事に、次のように記されている。

秋七月に、丹波国の余社郡の管川の人瑞江浦嶋子、舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。便に女に化なる。是に、浦嶋子、感りて婦にす。相逐ひて海に入る。蓬萊山（とうらいざん）に到りて、仙衆（せんしゆ）を歴り觀る。語は、別巻に在り。

（『日本書紀』卷第十四・雄略二十二年）

ここでは、「蓬萊山」が「とこよのくに」と訓まれている。〈常世国〉は、〈蓬萊山〉と同じく海の彼方に空想された異郷である。そのイメージの近さから、このような訓みが当てられているのだろう。しかし、日本で生まれた〈常世国〉という異郷は、〈蓬萊山〉という仙郷世界に限られないもっと広いイメージを持つものだったようである。

〈常世国〉について、『日本国語大辞典』（小学館）には次のように説明してある。

古代人が、海のむこうのきわめて遠い所にあると考えていた想像上の国。現実の世とはあらゆる点で異なる地と考えた国で、後に、不老不死の理想郷、神仙境とも考えられた国。常世。

〈常世国〉の神仙郷としての姿は後天的なものであることは確かだろう。それでは〈常世国〉という語が指す異郷がもともとどのような世界であったのだろうか。それについては、様々な説が論じられている。本居宣長は『古事記伝』において、

常世ノ国とは、如此名けたる国の一ツあるには非ず、たゞ何方（いづか）にまれ、此ノ皇国（みくに）を遙に隔り離れて、たやすく往還（ゆきまひ）がたき処を泛く云名なり、故レ「常世は借字にて、」名ノ義は、底依国（ソコヨリ）にて、たゞ絶遠（たぎ）き国なるよしなり、

としている。（注）さらに、折口信夫氏は、

一代古い処では、とこよが常夜で、常夜経く国、闇かき昏す恐しい神の国と考へて居たらしい。

と述べられている。（注）

〈常世国〉の前身として、「底依国」「常夜国」が挙げられているが、それには賛成し難い点がある。松村武雄氏が、

わが常世国の原義やその観念・信仰の中核の如きも、

「遙遠の国」ではなくて、存在・生命に於て常恒とい

ふ衆庶にとつて極めて「望ましきもの」たる特質を端的に表出するものとしての「常世国」であつたと思はざるを得ない。(中略) わが常世国も、それを發生・成立させた直接の母胎は、現実の生活では獲得し難いさまざまの望ましきもの・願はしきものへの強いあくがれ・欲求であつて、折口氏の所謂「常夜国」若くは「夜見の国」ではない。「常夜国」・「夜見の国」は、さうした母胎からの生誕に一つのきつかけ若くは素材を供給したに過ぎないと思ふ。

と述べられているように^(注1)考える方が自然ではないかと思う。確かに、〈常世国〉が死者の靈の行き先と考えられていたことがあつたのは事実だろう。記紀において、オオクニヌシノ神と共に国作りを行なつたスクナビコナノ命や、神武天皇の兄であるミケイリヌノ命が「常世国(常世郷)」へと渡つたとされている。

少彦名命、行きて熊野の御崎に至りて、遂に常世郷に^(注2)適しぬ。亦曰はく、淡嶋に至りて、粟茎に縁りしかば、弾かれ渡りまして常世郷に至りましきといふ。

(『日本書紀』卷第一・神代上)

三毛入野命、……則ち浪の秀を踏みて、常世郷に往でましぬ。
(同卷第三・神武天皇即位前紀戊午年)

スクナビコナノ命、ミケイリヌノ命は、「常世郷」へ渡り、帰つては来なかつた。地上から姿を消してしまつたということはつまり、死を意味すると考えてもよいのではないだろうか。^(注3)

しかし、ここで言う「常世郷」は、イザナミノ命の住むとされる「黄泉国」のように暗く穢れた死者の世界として恐れられていたとは思えない。それよりもむしろ、祖先の靈が住まう国として慕われ、敬われていたように感じられる。スクナビコナノ命は、その後、酒の席でのめでたい歌の中に歌われている。

此の御酒は 吾が御酒ならず 神酒の司 常世に坐す
いはたす 少御神の 豊寿き 寿き廻ほし 神寿き
寿き狂ほし 奉り来し御酒ぞ あさず飲せ ささ

(『日本書紀』卷第九・神宮皇后摂政十三年)

「常世」におられる、「酒の司」であるスクナビコナノ命がたいへんな祝福をして、献上された御酒なのだからどんどん飲みなさい、といった内容である。少なくともこの歌

の中では、スクナビコナノ命のいる場所は、暗い死の世界とは考えられない。

また、ミケイリヌノ命と共に居たイナヒノ命は、海に入って「鋤持神」となった。これに続けて記されたミケイリヌノ命も、「常世郷」に渡るという形で、やはり神格化されたのではないだろうか。そうすると、この「常世郷」は、明るいイメージを持った世界と考えられる。

〈常世国〉は、常に続く世界、永遠の世界という人々の憧れの対象として生み出された。現実にはあり得ないものであるが故に、そこは遠くに遠くに存在するとされるようになっていった。人々はそれを自分の住む領域の外、つまり未知の世界に求めていた。文明が進み、既知の世界が広がっていくにつれ、島国日本に住む人々にとっての「遠く」が、「海の彼方」となっていったのは自然の成り行きだろう。

〈常世国〉は、海の彼方に存在するとされ、その上、もともと憧れの地・理想郷という要素が含まれているものだった。だからこそ、〈常世国〉は、何の抵抗もなく、〈蓬莱山〉と同一視されるようになっていったのではないだろうか。〈蓬莱山〉という異郷が日本で親しまれたのも、理想郷として近いイメージを持つ、この〈常世国〉の存在があったからこそなのではないだろうか。

しかし神仙的な修飾が加えられていくうちに、〈常世国〉自体も神仙郷として扱われるようになってしまふ。その例として、天皇の命により「時じくの香の実」を求めて「常世国」に渡ったタジマモリの記事がある。

命おほをこを天朝あまのみくにに受りて、遠くより絶域はるかたらくに往る。万里とほく波を踏みて、遙に弱水よわのみづを度る。是の常世国は、神仙しんせんの祕区かくれなくに、俗ただひとの臻らむ所に非ず。

〔書紀〕卷六・垂仁天皇後紀

「弱水」というのは、神仙思想において、東方の「蓬莱山」や、それと並んで有名な西方の「崑崙山」の側を流れる川の名である。そこは、空を飛ぶ仙人以外渡ることが出来ないとされている。「弱水」に隔てられた「神仙祕区」であるというこの「常世国」は、完全に神仙郷として扱われていることがわかる。

このように、祖先の霊が住んでいたはずの〈常世国〉は、いつのまにか大陸的な神仙の世界になってしまった。このことは、奈良と平安初期にさまざまな漢文で書かれ成立した浦島説話を見ても明らかである。

2 浦島説話の蓬萊山

現在の浦島太郎の物語における「竜宮城」に当たるのが、先に挙げた『書紀』における「蓬萊山」である。『書紀』の記事は、浦島説話の初見なのだが、「仙衆を歴り覩る」という表現などから、それは既に神仙説話として描かれていたと考えられる。

『書紀』の他にも、『丹後国風土記』逸文、『浦島子伝』など、古い段階の浦島説話のほとんどが〈蓬萊山〉を舞台としてゐる。まず、『風土記』を引用する。

…女娘をめ曰ひけらく、「君、棹を廻らして蓬山とよのくにに赴か
さね」…即ち不意ときの間に海中うみなかの博く大きな嶋に至
りき。其の地は玉を敷けるが如し。岡台うたなは暗映かみくろく、楼
堂どのは玲瓏てりかなやきて、目に見ざりしところ、耳に聞かざり
しところなり。 (『丹後国風土記』逸文)

ここでの「蓬山(蓬萊山の略称)」も、「とよのくに」と訓まれている。しかし、その描写を見ると、その場所は日本的な〈常世国〉ではなく、神仙郷そのものを表していると言える。この『風土記』には、「仙都とよ」「神仙とよの堺く」などの表現もあり、神仙思想の影響を強く受けていることがう

かがわれる。

そして、『浦島子伝』では、ますます神仙的色彩合いが濃くなっている。

…妾は是れ蓬山とよの女にして、金闕の主なり。不死の金
庭、長生の玉殿は妾の居る所なり。…其の宮の為
躰たたく、金精玉英を丹あかき堦かの内に敷き、瑤珠珊瑚を玄
したには
圃の表に満たせり。清池の波心に、芙蓉はちすく脣を
開きて栄を発はき、玄しつ泉の涯頭に、蘭菊咲を含みて
稠しげからず。嶋子、神女と共に玉房に入りき。薰風
は宝衣たからを吹きて、羅帳うすまじはりに香を添へ、紅嵐翡翠
を巻かき、容帷玉かざるを鳴らし、金窓斜に素月幌しろきまを
射し、珠簾動いて松風琴を調べ、朝あしたに金丹石髓を
服のみ、暮に玉酒瓊漿を飲みき。千茎の芝蘭は、老を
駐とどむるの方うへ、百節の菖蒲は、齢を延ぶるの術てだてなり。

(『群書類従』収『浦島子伝』)

美しい表現に彩られたこの「蓬萊とよのくに仙宮」は、まさに神仙郷である。「金丹石髓」「玉酒瓊漿」などは、仙薬に他ならない。ここには、日本的な〈常世国〉のイメージは、全くと言っていい程感じられない。浦島説話は神仙説話として描かれている。

ところが、浦島説話の最も古い形を残していると言われ
る『万葉集』においては、少し違っている。ここでは神仙
的色合いは薄く、〈蓬萊山〉の語は見当たらない。そのか
わりに「常世に至り」「常世辺に」という表現がある。

……海若の 神の女に たまさかに い漕ぎ向ひ
相誂ひ こと成りしかば かき結び 常世に至り
海若の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携はり
二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世
に ありけるものを …… 常世辺に また帰り来て
今のごと 逢はむとならば この篋 開くな勤と
……玉篋 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世
辺に 棚引きぬれば ……
常世辺に住むべきものを 剣刀己が心から鈍やこの君

(巻九・一七四〇、一七四一)

それでは、浦島説話の本来の形は、〈常世国〉と〈蓬萊
山〉のどちらを基にしたものだったのであろうか。どちら
の説も論じられているが、〈常世国〉と結論づけている下
出積與の次の説が最も射ていると思う。

この説話は決して、わが国に全然発生したり受容し得

る因子がないのに、大陸との交渉により齎らされた、
道教の蓬萊山思想を機縁として形成されたといふ如き
ものではないのである。もしさうした種類のものでは
あったならば、全然受け入れられないか、または一時
は好奇心や珍らし気からもてはやされても、間もなく
霧散するといふ人類思想上の共通現象の枠内に入るべ
き運命をたどつたであらう。しかしながら浦島子説話
は事実において発生以後数世紀に亘つて生命を保つて
ゐるのであり、ことに浦島子を祭神とする神社が各地
に発生してゐるのは正にその逆といはなくてはならぬ。
即ち元来古代人の有してゐた世界観としての常世国思
想が、その具体的な表出を浦島子説話に求めたのであ
り、それがおそらく五・六世紀頃から大陸の蓬萊山の
概念と渾融されたものと解するのがより至当であらう。

〈常世国〉思想から生まれた浦島説話は、大陸との交渉
の中で、神仙思想の影響を受け、〈蓬萊山〉と融合して
いった。浦島説話は神仙説話として描かれるようになった。
古い時代にはその原形となるものが存在していたはずだが、
記載の時代に入る頃には、既に神仙思想と結びついてし
まっていたということだろう。そして『書紀』『風土記』
『浦島子伝』などのように漢文で描かれたからこそ、その

影響はより強かったと考えられる。

『万葉集』においてはどこにでもいる漁師であった浦島子は、『浦嶋子伝』では「地仙」と呼ばれ、はじめから神仙の資格を持っていた人間となっている。〈常世国〉は神仙郷として描かれるようになり、神仙の資格を持たない人間には手の届かないものとなってしまった。漢文によって美しく描写しようとする程、そこは本来の〈常世国〉ではなくなっていた。それどころか、逆に神仙であることが〈常世国〉の要素とされるようになり、〈蓬莱山〉という枠の中に落ち着いてしまうこととなった。〈蓬莱山〉の受容は、日本にとって大きな意味を持つものだったと言えるだろう。

三 文学の中の蓬莱山

1 『竹取』『宇津保』『源氏』の蓬莱山

人々に受け入れられた〈蓬莱山〉は、『竹取物語』『宇津保物語』『源氏物語』など、平安時代を代表する、有名な作り物語の中にも登場するようになる。浦島説話では〈蓬莱山〉||〈常世国〉として扱われていたが、ここでは神仙郷〈蓬莱山〉そのものが登場している。〈常世国〉を間に置かずとも、人々は〈蓬莱山〉という異郷を理解するようになっていたのだろう。

『竹取物語』において、かぐや姫は五人の貴公子に難題を出す。その中の一つが「蓬莱の玉の枝」だった。『列子』『湯問』にある「珠玕の樹」とそのイメージは重なる。

「車持の皇子には、東の海に蓬莱といふ山あるなり。それに白銀を根とし、黄金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りてたまはらむ」

車持の皇子は、「蓬莱の山」について語る。五百目の漂流の末に、やっとたどり着いた「海の上に漂へる山」であったと言う。そして、その山の様子を次のように説明する。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらを廻れば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れ出でたり。それには、いろいろの玉の橋渡せり。その辺に照り輝く木ども立てり。

そこには、「天人のよそほひしたる女」が居たと語りつている。この場所はまさに神仙郷〈蓬莱山〉である。

また、『宇津保物語』『源氏物語』に登場する〈蓬莱山〉

の例としては、次のようなものがある。ここでは、「かめのヲの山」(注)「亀の上の山」としても表現されている。

『宇津保物語』「忠こそ」巻

頂の上を、蓬萊の山になさんと、掌の中に、黄金の大殿をつくらんといふとも、忠こそがいはんことはたがへじ

「菊の宴」巻

かめのヲの山にはたれもいたりなん 君をまつにぞ

老もしぬべき

舟のうちならぬ人さへ

「初秋」巻

今蓬萊の山へ不死薬取りに渡覧ことは、童男卯女だに、その使にたちて、舟の中にて老い、島の浮べども蓬萊を見ずとこそなげきためれ。

『源氏物語』「帚木」巻

かかれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚のすがた、唐国のはげしき獣の形、目に見えぬ鬼の顔などのおどろおどろしく作りたる物は、心にまかせてひ

ときは目驚かして、実には似ざらめど、さてありぬべし。

「絵合」巻

まづ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせてあらそふ。(中略)車持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に瑕をつけたるを、あやまちとなす。

「胡蝶」巻

亀の上の山もたづねじ舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ

「宿木」巻

ただ今も、はひ寄りて、世の中におはしけるものを、と言ひ慰めまほし。蓬萊まで尋ねて、釵のかぎりを伝へて見たまひけん帝はなほいぶせかりせん。

以上のように、この時代には、〈蓬萊山〉は〈蓬萊山〉そのものとして和文でも描かれるようになってきた。いずれを見ても、その作者は〈蓬萊山〉という神仙郷の姿を理解しているということがわかる。そして、これらが今に至

るまで読み継がれていることは、作者のみならず、これらを読んだ平安期の人々にも神仙郷〈蓬萊山〉が浸透していたということを証明していると言えるだろう。

2 漢詩文の中の蓬萊山

時代が下るにつれて、人々の共通理解となった〈蓬萊山〉は、今度はそれ自身の意味が広がっていく。〈蓬萊山〉の語が多く引用された漢詩文を見るとそれがよくわかる。

神仙説話が多く伝えられた八世紀から九世紀頃、日本では中国文化への関心が高まり、和歌よりも漢詩が重んじられていた。当時の人々にとって、漢詩文の知識は出世にもつながるようになり、律令社会での教養として当然のものであった。こうして、数多くの漢詩文集が作られた唐風謳歌の時代を迎える。この時代は、国風暗黒時代とも呼ばれている。日本的な〈常世国〉という異郷が、中国的な神仙郷へと変わっていった一因とも言えるだろう。

そのような時代の下で、〈蓬萊山〉などの神仙郷は、日本漢詩文の中に数多く詠み込まれていた。ただ、その〈蓬萊山〉という語（蓬洞、蓬壺なども表現される）が表す内容をしてみると、時代が下るにつれ、神仙としての姿とは別の扱い方をしているものが増えていくことがわかる。平

安期の漢詩文中の〈蓬萊山〉の意味は、大きく、(1)神仙郷、(2)宮中・内裏、(3)日本、(4)殿上人、という四つの種類に分けることができる。

(1) 神仙郷としての蓬萊山

まず当然のことながら、本来の姿、神仙郷として詠まれた漢詩文が最も多い。『懷風藻』から一例を挙げる。

● 安得王喬道。 安にか王喬が道を得て、

控鶴入蓬瀛。 鶴チを控チきて蓬瀛に入らむ。

(『懷風藻』11 葛野王)

「王喬」は王子喬のことで、周の靈王の太子であり、仙術を学び、ついに仙人となつて、白い鶴に乗って天にのぼつたとされる人物である。そして「蓬瀛」は、『史記』『列子』にも出てきた三神山のうちの「蓬萊」と「瀛州」を指している。

このような、神仙郷としての〈蓬萊山〉を詠んだ詩は、平安時代全般に渡つて数多く見られる。〈蓬萊山〉は人々の間に深く浸透し、好まれ続けていたということがわかる。

(2) 宮中・内裏としての蓬萊山

平安中期以後、〈蓬萊山〉という語を用いて宮中や内裏を表す漢詩文が詠まれるようになる。仙郷表現を加えることにより、天皇を讃えようとしているのだろう。また、宮中・内裏という場所は、手が届きにくいけれど、美しい憧れの対象として、〈蓬萊山〉という表現がびつたりだったのだろう。例えば次のような漢詩がある。

● 幸牽蓬洞鵷鸞客

謬接松門翰墨遊

幸ひに蓬洞の鵷鸞の客に牽かれて
謬りて松門の翰墨の遊びに接
れり

(『本朝無題詩』巻八・557 大江匡房)

幸いにも宮中(蓬洞)の貴顕(鵷鸞客)に誘われ、詩文の遊びに交わるという身に余る機会に恵まれた、といった意味に訳される。「蓬洞」という語は、宮中を譬えて言うのに用いられている。

この宮中・内裏としての〈蓬萊山〉の例も数多い。このような例が現れてくるのは、平安中期以後のことである。当時の王朝の人々にとって、宮中を神仙郷に見立てるといふことは共通の理解になっていたということだろう。

(3) 日本としての蓬萊山

〈蓬萊山〉は東の海に浮かぶ山。そのこともあってか、東の国日本を〈蓬萊山〉に見立てる漢詩文も詠まれている。『田氏家集』の漢詩に次のようにある。

● 行李礼成廻二節信一。

行李礼成りて 節信を廻らす。

扶桑恩極出二蓬壺一。

扶桑恩極まりて 蓬壺を出だす。

(『田氏家集』巻中・114

「夏夜於二鴻臚館一饒二北客帰郷一。」)

遠い地へ帰っていく客へのはなむけの詩である。ここでの「蓬壺」は、神仙郷〈蓬萊山〉そのものを指すのではなく、日本を指して表現したものだと考えられる。

(4) 殿上人としての蓬萊山

さらに、〈蓬萊山〉は、殿上人や高貴な人を表す語としても用いられている。例えば次のような詩がある。

● 蓬島李門尋累跡

蓬島李門 累跡を尋ね

寄望高仰徳風馨 望を寄せて 高く仰がん 徳風の

馨かぐはしきを

〔本朝無題詩〕 卷十・775 藤原敦光

「李門」というのは、李膺の門下生がよく出世したことによるもので、立身出世の門を表している。ここでは、「蓬島李門」という表現で、優れた人物のことを指して詠んでいる。この様な用例は、平安後期の漢詩文の中に存在するようになる。

平安期の漢詩文集における〈蓬萊山〉の用例は、引用したのも含めて、下の表のようになっていいる。

これを見ると、神仙郷としての〈蓬萊山〉はもちろんだが、宮中・内裏を指しての〈蓬萊山〉もかなり多いことに気が付く。平安中期以後は、仙郷という本来の意味からは離れた扱いが増え、『本朝文粹』などになると、その例のほとんどが宮中・内裏としての〈蓬萊山〉になっている。日本や殿上人としての扱い方をされるのも平安中期以後からが多い。それだけ、その頃には、人々が〈蓬萊山〉がどのような場所かを理解していたということだろう。

このようにして〈蓬萊山〉は人々に親しまれ、馴染んでいき、日本人の異郷観の一つとなっていくのである。

	書名・成立			
	仙郷	宮中・内裏	日本	殿上人
『懐風藻』(七五)	1	0	0	0
『凌雲集』(八一四)	1	0	0	0
『文華秀麗集』(八一八)	1	0	0	0
『経国集』(八二七)	2	0	0	0
『性霊集』(八三五)	2	0	0	0
『田氏家集』	0	0	1	0
『都氏文集』(八七九〜八〇〇)	1	0	0	0
『菅家文章』(九〇〇)	2	1	0	0
『粟田左府尚齒会詩』(九六九)	1	0	0	0
『本朝麗藻』(一〇一〇)	2	0	0	0
『江吏部集』(一〇一三)	1	2	0	0
『和漢朗詠集』(一〇三三)	1	2	0	0
『本朝文粹』(一〇五八〜六五)	5	11	0	1
『新猿楽記』(一〇六六)	1	0	0	0
『本朝文集』	4	2	0	2
『朝野群載』(一一一六)	0	0	1	1
『本朝統文粹』(一一四〇以降)	4	11	0	2
『本朝無題詩』(一一六二〜六四)	11	4	0	1

四 結 び

日本では、古代から〈常世国〉という異郷が空想されていた。そしてそれは大陸との交流により、新しい要素を含んで発展していった。

ただし、問題となるのが、漢文による表現の中で、〈蓬莱山〉のイメージの方が強くなってしまったということである。〈蓬莱山〉が蜃気楼という、ある意味では現実のものであったのに対して、〈常世国〉は人々の空想の世界だけに存在する、決まった形の無い異郷だったと考えられるのである。

古代日本人が思い描いていた〈常世国〉という異郷は、目新しい〈蓬莱山〉という異郷観を取り入れるための媒体となった。そしてそれ自身も、神仙思想の影響を受けて変化していった。これによって、日本の異郷が本来の形から離れていったことも事実であるが、神仙思想がもたらした〈蓬莱山〉が、ただの一時の流行などではなく、日本古来の異郷観を含み込んだ場所として、人々の心に浸透していたということも事実だろう。

神仙郷〈蓬莱山〉は、日本的異郷観〈常世国〉本来の姿の喪失というマイナス面をもたらしながらも、それを補えるほどの親しみやすさを持った理想郷という新しい異郷観

をもって受容された。〈蓬莱山〉は、日本の異郷と融合することにより、人々に親しまれ続けた。

『竹取物語』『宇津保物語』『源氏物語』といった平安時代を代表するような作品の中に〈蓬莱山〉が扱われていたこと、漢詩文の中に新しい意味を持つ〈蓬莱山〉が生まれできたこと、このような現象が起ったのも、それだけ人々に親しまれたからこそだろう。しかもそれらは、現代までも残され、読み継がれているのである。

日本でも中国でも、さらに世界においても、憧れの対象としての異郷の存在があった。その存在は語り継がれ、広まっていき、さらにまた新しい要素を加えて発展していった。そしてそれは、現代の私たちにも伝え残され、単なる空想世界ではない奥深さを感じさせている。

〈引用〉

○ 『史記』『列子』——新釈漢文体系（明治書院）

○ 『日本書紀』『風土記』『万葉集』『宇津保物語』

『懐風藻』——日本古典文学大系（岩波書店）

○ 『浦島子伝』

——『浦島子伝』重松明久 著（現代思潮社）

○ 『竹取物語』——鑑賞日本古典文学（角川書店）

○ 『源氏物語』——日本古典文学全集（小学館）

○『本朝無題詩』

——『本朝無題詩全注釈』本間洋一 注釈（新典社）

○『田氏家集』

——『群書類従』第九輯（続群書類従完成会）

◎引用文について、仮名遣いは原文のままとし、旧字体は原則として常用漢字に改めた。

《注》

1 「蓬萊山在海中」（『山海経』第十二「海内北経」）

2 『本居宣長全集 第十卷』大野晋 編（筑摩書房、昭和四三年）八頁

3 折口信夫「妣が国へ・常世へ」（『折口信夫全集第二巻 古代研究（民族学篇Ⅰ）』中公文庫、一九七五年）一二頁

4 松村武雄『日本神話の研究 第四巻』（培風館、昭和三年）四〇一〜四一一頁

5 折口信夫氏が次のように述べられている。「みけぬの命の常世は、別にわたつみの宮とも思はれぬ。死の国の又の名と考へても、よい様である」（前掲書 一二二頁）

6 高木敏雄氏は、『風土記』の記事は、中国神仙譚と結びついたもので、純粹の浦島説話ではない、少しも彫琢

が加えられた痕跡のない『万葉集』の長歌が、原始の説話にも最も近いものであると信じる、と述べられている。

（『浦島伝説の研究』『日本神話の研究2』東洋文庫二五三、平凡社、昭和四九年）

7 〈蓬萊山〉を、浦島説話を修飾するために中国神仙説の模倣したものとす高木敏雄氏の説（前掲書）、〈蓬萊山〉と〈常世国〉は区別されたものであり、神仙的要素を除いてしまったら浦島説話は語れないとする三浦佑之氏の説（『浦島太郎の文学史 恋愛小説の発生』五柳書院、平成五年）など。

8 下出積與「常世國の性格―日本道教史の一節―」（『東方宗教』第三号、一九五三年）七四頁

9 「かめのヲの山」「亀の上の山」は〈蓬萊山〉を表す語である。先に引用した『列子』「湯問」の部分の続きに、漂う五山を固定させるため、十五匹の巨大な亀の首の上に五山を載せ、支えさせた、という記述がある。